

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.1

Lester Young【レスター・ヤング】

～哀愁のポーク・パイ・ハット～

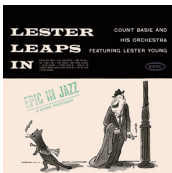


Profile

写真提供：ユニバーサル・ミュージック『レスター、最後のメッセージ』（UCCM-3048）より

1909年8月27日ミシシッピ州ウッドビル生まれ。本名はレスター・ウィリス・ヤング。幼い頃にニューオーリンズへ移住。南部を中心に、父親をリーダーとしたファミリー・バンドで演奏する日々を送る。少年期はヴァイオリン、トランペット、ドラムスを演奏し、13歳の時にサクソフーンに転じる。1927～35年にかけて、地方のバンドで演奏を重ねる傍ら、カンザス・シティに拠点を移し、33年春にベニー・モーテン楽団に参加。その後、カウント・ベイシー楽団に加入するが、34年初めに脱退。フレッチャー・ヘンダーソン楽団に加入するが、36年に再びベイシー楽団に迎えられ、40年12月まで在籍。この間、恋人であったビリー・ホリデイと数多くのレコーディングを行なう。その後は、自己のバンドや、弟のリー・ヤング（ds）と双頭バンドを組むなど精力的に活動し、43年10月には三度、ベイシー楽団に特別ゲストとして、同年12月にはスター奏者として迎えられている。46年からはJATPにも参加。晩年は兵役に取られ、人種差別による迫害を受けることで、精神を病み、ドラッグに溺れ、入退院をくり返すなど不遇の生活を送る。そして、1959年3月15日、アルバムレコーディングを行なったバリから帰国した直後、ニューヨークで死去。享年49歳。そのレスターの死後、互いに“プレス”、“レディ・デイ”と呼び合う恋仲であったビリー・ホリデイが、後を追うように逝ったことはあまりにも有名。

最絶頂期といわれるベイシー楽団での名演集



Lester Leaps In
Count Basie And His Orchestra
 Featuring Lester Young
 (ソニー・ミュージックジャパン
 インターナショナル: EICP-7027)

Count Basie and his Orchestra: Count Basie (p), Lester Young (ts), etc

1. Rock-A-Bye Basie 2. Taxi War Dance 3. Jump For Me 4. 12th Street Rag 5. Clap Hands, Here Comes Charlie 6. Dickie's Dream 7. Lester Leaps In 8. Song Of The Islands 9. Moten Swing 10. Shoe Shine Boy 11. Lady Be Good 12. Boogie Woogie

ビリーとレスターの愛の物語



Billie And Lester ~Jazz Story~
Billie Holiday & Lester Young
 (ソニー・ミュージックジャパン
 インターナショナル: SRCS-8905)

Billie Holiday (vo), Lester Young (ts), Harry Edison (tp), Earl Warren (as), Freddie Greene (g), Teddy Wilson (p), Walter Page (b), Jo Jones (ds), etc

1. The Man I Love 2. This Year's Kisses 3. I Must Have That Man 4. Sun Showers 5. Foolin' Myself 6. Easy Living 7. A Sailboat In The Moonlight 8. It'll Never Be The Same 9. Trav'lin' All Alone 10. When You're Smiling 11. My First Impression Of You 12. If Dreams Come True 13. I Can't Believe That You're In Love With Me 14. You're Lucky Guy 15. Night And Day 16. All Of Me

ピークを迎えたレスターの哀愁のブローが胸を焦がす



Blue Lester
Lester Young
 (コンピュミュージックエンタテイメント:
 COCY-78290)

Lester Young (ts), Count Basie (p), Freddie Greene (g), Junior Mance, Johnny Guarneri (p), Jessie Drakes (tp), Rodney Richardson, Leroy Jackson, Billy Taylor (b), Hank D'Amico (cl), Shadow Wilson, Roy Haines (ds), etc

1. Ghost Of A Chance 2. Crazy Over Jazz 3. Ding Dong 4. Back Home In Indiana 5. These Foolish Things 6. Exercise In Swing 7. Blues 'N Bells 8. Salute To Fats 9. June Bug 10. Blue Lester 11. Jump, Lester, Jump 12. Basie English 13. Circus In Rhythm 14. Poor Little Plothing 15. Tush

永井荷風とレスター・ヤング

トレードマークのポーク・パイ・ハットをちょこんと頭に寄せ、小首を傾げてテナーを吹くレスター。どこか寂しげで難解しそうな印象を受けるが、誠に個性的かつ紳士的なジャズマン。己の信じた道を突き進んだ挙句、孤独な最期を迎える生き様は、その風貌と共に、何処となく日本が誇る作家、永井荷風のそれと似ている。昭和30年代の日本、映画『男はつらいよ』の寅さんこと、車寅次郎風に語るなら、「ジャズ高鳴る大東京〜」下町は浅草辺りがいいだろう。厚手のコートにポーク・パイ・ハットの出で立ちで、ケースに仕舞い込んだテナーを片手に、六区街をトボトボと歩くレスターの姿を想像しても何ら違和感がない。ストリップ小屋の楽屋に入り浸りていても構わないだろう。私にとってレスター・ヤングとは、そんな下町の風情を感じさせる人情味が溢れるような、切ないほど哀愁が漂うジャズマンだ。(因みに、嘗て大橋巨泉により“日本のレスター・ヤング”と命名されたのは、テナー・サクソ奏者の尾田悟。)

これはカウント・ベイシー名義のアルバムだが、レスターの最絶頂期といわれるベイシー楽団在籍時、1939~40年の“ウォルカロン・セッション”からレスターの名演がフューチャーされた名盤。30歳前後の若きレスターの革新的でオリジナリティ溢れるテナーが光り輝く。この当時のレスターの音源は輸入盤などでも入手できるが、この一枚は是非とも押さえておきたい。絶頂期と称される通り、ベイシー楽団在籍時のその繊細で紳士なサウンドは聴くものをグッと惹きつける。既に自分のスタイルを確立させた若きブルースの魅力が満載！特に、「シュー・シャイン・ボーイ」「レディ・ビー・グッド」のソロは絶品。

イラストラーター・笹尾俊一氏による絵本『JAZZ STORY』(BNN出版)からのシリーズで、同氏の選曲・解説 & イラストによるコンビ。30年代後半に2人が共演した音源を集めた最高のコラボレーションが聴ける。愛や刹那といった心情を切々と歌い上げるビリーの歌声、それに寄り添い響きかけるようなレスター。ビリーの唱法とレスターの音色にはある種共通の美 & リリシズムがある。特に、「Foolin' Myself (はかなあたし)」、「I Must Have That Man (あの人でなければ)」、「This Year's Kisses (今年のキス)」のレスターの歌心には感服。これぞジャズのソロ、アドリブの真髄だ！

1944と49年にサヴォイで録音された4つのセッションを収録した全15曲。ピークを迎えた44年の録音を中心に、歌うテナーからブローするテナーへの変貌過程におけるレスターの個性が際立つ。この時期はバード & デューシーに代表されるバップの波に押され、精彩を欠きつつあったレスターだが、C・ベイシーを筆頭に個性的な共演者とのセッション、軽快なソロも聴ける。特に、文字通り“ブルー”な心情を物語る哀愁を帯びたタイトル曲「ブルー・レスター」の名演は必聴！レスターの死後、そのスタイルはスタン・ゲッツを代表とする白人クール派に受け継がれたが、今こそレスターのテナーに注目すべきだ。

力強いブローだけがジャズじゃない！

コールマン・ホーキンスの男性的で、野性的なテナー・サウンドに対し、ある意味女性的、クールでナイヴな感受性溢れるサウンドで革命をもたらしたレスター。その歌心満載のソロ、ガラス細工の如き繊細さを感じさせる音色は、テクニクだけで表現できる代物ではないが、ジャズのアドリブの極意を体感するなまらずレスターだろう。

映像で拝む“プレス”

雑誌『ライフ』専属カメラマン、ジョン・ミリが1944年に撮影した『Jammin' The Blues』というモノクロ映像。テナー奏者レスター・ヤングの演奏が写真的に綴られ、一つ一つのショットが美しい。また、嘗ての恋人ビリー・ホリデイとのツーショットを拝みたいなら、『Song Of Jazz』がよい。晩年を迎えたレスターのプロウ後、その姿を一瞥し、ちよびりにはにかなだような笑みを見せるビリーの表情がもの悲し過ぎる。その瞬間、思わず胸がジーンと熱くなる。